

【九州国立博物館】(計 30 件)

(1) 購入 (30 件)

<絵画> (9 件)

- 1 ○名称 星曼荼羅 (ほしまんだら)
○時代 鎌倉時代・13 世紀
○品質 絹本着色
○員数 1 幅
○寸法等 本紙:縦 92.4cm 横 41.3cm 表具:縦 177.2cm 横 59.2cm 軸長 64.2cm
○作品概要 掛軸装。閻魔天を主尊として、道教に由来する 57 尊を描いた星曼荼羅の一種。真言宗小野流の覚禪 (1143~1213~?) による図像集『覚禪鈔』の記述との一致から、除病延命などを目的とする修法、閻魔天供に用いられたと考えられる。ほぼ同図様の作例が複数現存することから、本図の図像が一定の流布をみたこと、またその中でも制作が鎌倉時代にさかのぼる本図は祖本にもっとも近いと推測される。星曼荼羅の遺例が少ないなか、道教と仏教の混交を示し、なおかつ閻魔天信仰の要素も合わせもつ本図は稀少である。史料により具体的な使用の場が想定される点も、中世における道教美術の受容およびその展開を考える上で大変意義深い。
- 購入金額 40,000,000 円



- 2 ○名称 寒山拾得図 (かんだんじつとくず)
○作者等 藝愛筆
○時代 室町時代・16 世紀
○品質 紙本墨画
○員数 2 幅
○寸法等 本紙 右:縦 33.6cm 横 18.4cm 左:縦 34.3cm 横 18.4cm
表具 右:縦 103.3cm 横 29.2cm 軸長 33.8cm 左:縦 102.4cm 横 29.2cm 軸長 33.8cm
○作品概要 掛幅装。左幅には崖下に立ち右手に筆をとる寒山を、右幅には背後を振り向き右手で岩上に墨をする拾得を描く。その表現は、伸びやかな筆使いが特徴で、風を受ける袖や手繰られた袖などの着衣を、丸みを帯びたやや太い筆線で描く表現が目される。作者は、表現と印章から判断して、室町時代後期の 16 世紀前半から中葉に活躍した藝愛と考えられる。小品ではあるが、筆致と用墨をよくコントロールして、独特の形態感覚をもつ水墨画を描き上げる藝愛の特質をよく示す作品である。
- 購入金額 20,000,000 円



- 3 ○名称 夕霧図屏風 (ゆうぎりずびょうぶ)
○時代 江戸時代・17 世紀
○品質 紙本金地著色
○員数 6 曲 1 隻
○寸法等 本紙:縦 148.2cm 横 344.2cm 折畳時:縦 164.8cm 幅 61.0cm 厚 10.2cm
○作品概要 山里の秋の風景を表わす金地著色の屏風。本図は、『源氏物語』第 39 帖「夕霧」、光源氏の子息・夕霧が小野の山荘に落葉宮を訪ねる場面で、「源氏物語扇面貼交屏風」(広島・浄土寺蔵)をはじめ同場面を絵画化した類例は多い。なかでも本図は人物を省略した「留守模様」の手法をとる点で特徴的である。画風は、室町時代を最盛期として江戸時代初期頃まで制作されたやまと絵屏風の様式に近似する。遣明船などで国外へ輸出された中世やまと絵屏風を類推するための資料として、高い価値を持つ。
- 購入金額 32,400,000 円



- 4 ○名称 泰西風俗図屏風 (たいせいふうぞくずびょうぶ)
 ○時代 安土桃山～江戸時代 17世紀初期
 ○品質 紙本着色 屏風装
 ○員数 6曲1隻
 ○寸法等 本紙：縦101.7cm 横262.2cm 折畳時：縦114.5cm 幅48.5cm 厚9.6cm
 ○作品概要 田園風景のなかに西洋風の人物を描く初期洋風画。技法的には、絵具の濃淡で立体感を表わし、樹木・人物には影を付け、全体的に輪郭線に頼らず、色面とハイライトでモチーフを描写するなど、17世紀のイエズス会による西洋絵画教育の影響をうかがわせる。本作品は、10件ほどしか現存しない大画面構成の初期洋風画屏風の一例で、そのなかでも特に優れた描写と良好な保存状態をもつ優品である。なかでも本図の画風は、黒田家旧蔵本（現・福岡市美術館本、重要文化財）に描写が酷似している。近世初期に来日したヨーロッパ人との交流を通して、日本で隆盛した「南蛮美術」の大作である。下村観山旧蔵品。
 ○購入金額 250,000,000円



- 5 ○名称 老人読書図 (ろうじんどくしよず)
 ○作者等 伝信方筆
 ○時代 江戸時代 17世紀前半
 ○品質 紙本着色 額装
 ○員数 1面
 ○寸法等 本紙：縦24.5cm 横55.0cm 額装：縦60.8cm 横81.6cm
 ○作品概要 灰褐色を塗りこめた無地の背景に、読書する白髪の男性の上半身を描く。画面左下にはヨーロッパの紋章風の印章がある。本図と同様の絵画様式、ならびに同じ印章と「信方」という墨書を持つ「師父二童子図」（兵庫・神戸市立博物館蔵）、「日教上人像」（兵庫・青蓮寺蔵）があり、本図もこの「信方」なる筆者によるものと考えられる。人物は線描に頼らない西洋絵画の技法で描かれており、イエズス会が17世紀に開校した西洋絵画の画学校で学んだ画家による、初期洋風画人物図の代表作のひとつとみなされる。
 ○購入金額 15,000,000円



- 6 ○名称 花鳥図屏風 (かちょうずびょうぶ)
 ○時代 中国(マカオ) 17～18世紀
 ○品質 紙本着色 屏風装
 ○員数 4曲1隻
 ○寸法等 第1扇：縦149.0cm 横45.8cm 第2扇：縦149.0cm 横46.2cm 第3扇：縦149.0cm 横46.0cm 第4扇：縦149.0cm 横46.0cm
 折畳時：縦149.8cm 横49.5cm 厚11.0cm
 ○作品概要 多種の花木が咲き、川が流れる庭を舞台に、様々な鳥や動物が描かれる。鳳凰、鶴、虎と豹の番など東洋的な図様がいる一方で、ドラゴンや『イソップ物語』の挿絵銅版画を転用した西洋的モチーフが混じる。技法としても盛上技法を用いた金雲が画面を装飾しており、東西折衷的な表現が見られる。本作品は、17世紀から19世紀にかけて日本の屏風絵に倣って西欧世界で制作されたピオンボ（屏風）のうち、成立年代が特に早い。日本や中国などの東洋絵画のモチーフ・構図・技法と西洋絵画由来の主題・モチーフの混交が明確に指摘できる、重要な新出作品であり、

大航海時代の文化交流の様相を映し出す鏡と呼ぶべき希少な作例である。

○購入金額 9,100,000円



- 7 ○名称 花鳥図巻 (かちょうずかん)
○作者等 孫億筆
○時代 中国・清時代 康熙51年(1712)
○品質 絹本着色 卷子装
○員数 1巻
○寸法等 縦35.6cm 長719.5cm

○作品概要 約20種類50羽の鳥類と約50種類の植物を、継ぎ目のない料絹に鮮明な彩色を用いて細緻に表わす。作者は中国・福州(福建省)で活躍した画家・孫億(1638~1712?)。康熙51年(1712)の年記があり、画家の最晩年の基準作である。琉球国王・尚敬(1700~1751)の次男・誦谷山(ゆんたんだ)王子朝憲(尚和、1745~1811)の旧蔵品。琉球王府で活躍した座間味庸昌(殷元良、1718~1767)や屋慶名政賢(吳著温、1737~1800)などの画家たちが学んだ由緒もあるため、本図は琉球における中国絵画受容の根幹を規定した作品と意義付けられる。

○購入金額 32,400,000円



- 8 ○名称 海棠白頭翁・萱草百合図 (かいどうはくとうおう・かんぞうゆりず)
○作者等 沈南蘋筆
○時代 中国・清時代 乾隆12年(1747)
○品質 絹本着色 掛幅装
○員数 2幅
○寸法等 海棠白頭翁図 本紙:横53.2cm 縦102.1cm 表具:横67.3cm 縦206.3cm 軸長:72.4cm
萱草百合図 本紙:横53.2cm 縦102.1cm 表具:横67.4cm 縦206.3cm 軸長:72.4cm

○作品概要 海棠白頭翁図は、海棠に白頭3羽が留まるさま、萱草百合図は、水墨で表わされた背の高い岩を中心に1株の薔薇と2株の萱草、小禽を着色で描く。花鳥は鮮やかな彩色と繊細な描線で表されている。いずれも画中に沈南蘋(1683~1760?)の落款・印章があり、前者には乾隆12年(1747)の年記が見える。江戸時代の写生的な花鳥図に特に大きな影響を与えた南蘋だが、現に海棠白頭翁図を模した黒川龍玉筆海棠白頭翁図(千葉市美術館所蔵)や諸葛監筆海棠白頭翁図(個人蔵)が現存する。萱草百合図も『沈南蘋画百幅』(長崎県立長崎図書館所蔵)に「宜男百合図」が挙げられている。いずれも南蘋画の強い規範性と日本での受容を示す貴重な作例である。

○購入金額 15,000,000円

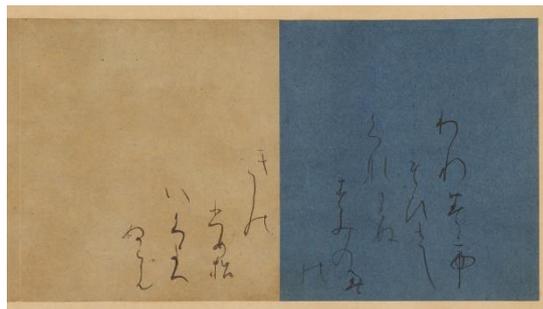


- 9 ○名 称 紙織八馬図（ししよくはちばず）
 ○時 代 韓国・朝鮮時代 18～19 世紀
 ○品 質 紙本着色
 ○員 数 1 幅
 ○寸 法 等 本紙：縦 105.7cm 横 54.2cm 表具：縦 195.6cm 横 70.3cm 軸長 79.0cm
 ○作品概要 木々の茂る岩場の水辺に、8 頭の馬とそれを眺める樹下の高士、馬を世話する人物を描く。本図は絵を描いた料紙を縦糸に、無地の料紙を横糸にして織り込む紙織画の技法を用いる。本紙墨書には「癸丑秋八月」「五白姜濤画」とあり、その制作年代は絵画の様式からみて朝鮮時代・正祖 17 年（乾隆 58 年、1793）に相当する可能性がある。作者は朝鮮時代の文献に該当する画家が見当たらないため、後考にまちたい。このような紙織画は現在 10 件を超える作例が確認されている。そのなかでも、料紙を横幅 1cm あたり約 8 つに裁断して織り込む本図は、最も細やかな拵目をもつ作品の 1 つである。
 ○購入金額 8,000,000 円



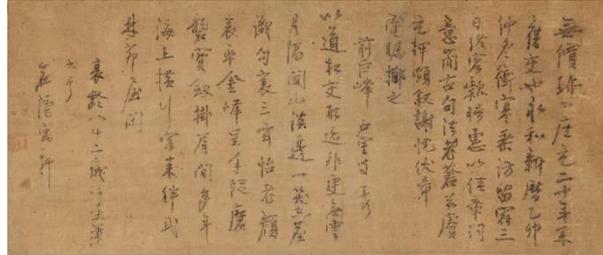
<書跡> (2 件)

- 1 ○名 称 継色紙「われみても」（つぎしきし われみても）
 ○指 定 重要文化財
 ○作 者 等 伝紀貫之筆
 ○時 代 平安時代 10-11 世紀
 ○品 質 彩箋墨書 掛幅装
 ○員 数 1 幅
 ○寸 法 等 本紙：縦 13.5cm 横 37.7cm 表具：縦 105.0cm 横 41.0cm 軸長 45.5cm
 ○作品概要 平安時代中期の書写になる「継色紙」は、当初は粘葉装の枳形の冊子本であったが、後世その優美な筆跡が愛好され、分割されて古筆切となった。当初の冊子の 3 頁分を貼り継いで掛幅装とした本作品は、『古今和歌集』巻第 17 に所収される読み人知らずの 1 首「我みても久しくなりぬ住江の 岸の姫松いく夜経ぬらん」を、濃い藍と薄い縹の料紙 2 頁に、連綿を積極的に用いて揮毫する。その書きぶりである「散らし書き」は、行頭を揃えない各行が紙上に揺らいで余白を意味あるものに変え、高い芸術性が見て取れる。また、本作品は、江戸時代前期、後水尾院の上覧に供されて紀貫之筆とお墨付きを得、京都大工頭・中井家に伝来したことが付属資料から判明する。近世における作品の伝来の姿と古筆尊重の気風が如実に確認でき、歴史的価値も高い。国立博物館として収蔵するに相応しい平安古筆の逸品である。
 ○購入金額 60,000,000 円



- 2 ○名 称 偈頌（げじゆ）
 ○作 者 等 石室善玖（1294～1389）筆
 ○時 代 南北朝時代・永和 3 年（1377）

- 品 質 紙本墨書
- 員 数 1幅
- 寸 法 等 本紙：縦 32.0cm 横 75.0cm 表具：縦 117.5cm 横 86.3cm 軸長 91.3cm
- 作品概要 掛幅装。筆者の石室善玖は南北朝時代を代表する臨済僧の一人。筑前国に生まれ、25歳で中国・元に渡り、古林清茂の法を嗣いだ。帰国後は、建仁寺・南禅寺など諸大寺を歴住し、また、古林清茂の門下（金剛幢下）らしく詩文にも秀でた。本作品は、20年来（1262～1329）の知己である臨済僧・無價掌珍（生卒不詳、聖福寺 51 世）から贈られた偈頌に対して、隠栖先の建長寺金龍庵内の岩隠軒で永和 3 年（1377）に唱和し揮毫した偈頌である。肥前松浦家伝来。
- 購入金額 18,000,000 円



<陶磁> (3 件)

- 1 ○名 称 藁灰釉茶碗（わらばいゆうちやわん）
- 作 者 等 上野
- 時 代 江戸時代 17 世紀
- 品 質 陶器
- 員 数 1 口
- 寸 法 等 高 9.2cm 口径 14.7cm 高台径 5.3cm
- 作品概要 口縁は外反し、胴部は高台脇から逆ハの字状に伸び、角度を変えてやや直立気味に上方に至る。高台は削り出しで二段に作る。釉は藁灰釉で、外面は白濁し、正面に大きく釉だれがある。見込み中央に茶溜りの窪みがあるなど、当初から桃山様式を意識した茶陶として作られたことが窺い知られる。上野は、17 世紀初頭、現在の福岡県田川郡福智町上野で朝鮮半島出身の陶工尊楷が窯を開いたのに始まり、初期の釜ノ口窯では桃山茶陶の様式を強く残した優品を生み出したことで知られる。陶土や作陶、釉薬のいずれも上野の特徴をそなえた、大振りの茶碗である。
- 購入金額 4,000,000 円



- 2 ○名 称 青花吹墨玉兔文皿（せいにかふきずみぎよくともんざら）
- 作 者 等 景德鎮窯
- 時 代 中国・明時代末期頃 17 世紀
- 品 質 染付磁器
- 員 数 1 枚
- 寸 法 等 高 3.9cm 口径 28.5cm 高台径 18.8cm
- 作品概要 轆轤成形により、平底でやや外側に向って立ち上がり、大きく折れて広がり鐙縁状の口縁とする。見込に吹墨の技法で兔文と短冊に「玉兔」と記した文様をあらわす。口縁部の外側と内側の先端部に呉須で一重の圏線を廻らし、その内側に蓮弁のような文様を描く。側面には、口縁部に呉須で一重の圏線を廻らし、その内側に蔓草のような文様を二方に描く。高台内無文。明時代末期に中国・景德鎮窯で作られた古染付の皿で、草創期の伊万里焼は本作品のような皿を模倣した染付磁器を数多く生産した。京都画壇で活躍した田近竹邨（1864～1922）の旧蔵品で、大正 12 年（1923）4 月の同氏の遺愛品入札会に出品された。
- 購入金額 8,100,000 円



3 ○名称 色絵紅葉流水文皿（いろえこうよりゆうすいもんざら）

○作者等 鍋島藩窯

○時代 江戸時代 18世紀

○品質 色絵磁器

○員数 5枚

○寸法等 高4.7cm 口径15.1cm 高台径8.0cm

○作品概要 轆轤成形により、高台を高めにより、腰から口縁にかけて曲線を描いて立ち上がり、木盃形とする。見込には、墨弾きの技法と呉須の濃淡により流水文をあらわし、その波間に散り落ちるような紅葉文を、赤色の線描きと、内側を赤・薄赤・黄・緑色の上絵具で塗込めて描く。側面には、呉須で七宝文を三方に描き、高台は櫛高台とする。本作品は5枚揃いで、いずれも均一に文様が施されているため、仲立ち紙を用いて下書きを転写したと考えられる。

巧みな文様表現が示す技術力の高さは隆盛期の鍋島焼のものであり、色鍋島あることから、染付磁器が生産の主流となった徳川吉宗の治世以前と作品と考えられる。5枚揃いで伝世した点も貴重である。

○購入金額 16,200,000円



<漆工> (1件)

1 ○名称 牡丹唐草螺鈿卓（ぼたんからくさらでんしよく）

○時代 高麗～朝鮮王朝時代・14～15世紀

○品質 木製漆塗

○員数 1基

○寸法等 縦26.8cm 横47.5cm 総高13.2cm

○作品概要 長方形の天板に低い脚を付けた小形の卓で、天板の左右両端にはゆるやかな筆返しを設ける。総体黒漆塗、天板中央にややいびつな四稜花形の窓枠を取り、枠内に牡丹唐草を螺鈿と金属線で表す。本品はその文様および技法の特徴から、高麗時代から朝鮮王朝時代にかかる時期に製作されたと考えられ、両時代にかかる過渡的作例として従来位置づけられてきた。現在、こうした作例は、わずかししか知られておらず、大変貴重な存在である。また、朝鮮王朝時代の螺鈿器は日本へ舶載されて大いに人気を博し、安土桃山時代には朝鮮風の螺鈿器も制作されるなど、日本の螺鈿にも大きな影響を与えた。

○購入金額 14,040,000円



<染織> (2件)

1 ○名称 緑地山道文金更紗茶具敷（みどりじやまみちもんきんさらさちやぐしき）

○作者等 布地：インド 仕立て：日本

- 時代 布地：表地 17～18世紀 裏地 18～19世紀前半 仕立て：江戸時代末～明治時代 19世紀～20世紀
- 品質 [表]緑地山道文金更紗 木綿単糸平織 [裏]黄・紅地縞織 経糸絹・緯糸木綿交織 平織
- 員数 1枚
- 寸法等 長199.5cm 幅115.0cm
- 作品概要 緑地山道文金更紗を表に、裏には黄色と紅色を交互に配した縞織を添わせ、間に無地の木綿を挟んで縫い綴じた敷物。表地の中央部には萌黄色と深緑色の山道模様(鋸歯文)を交互に配し、周囲には赤地に花卉文を配した縁取りを表す。山道模様の境界線には赤地に淡藍(緑)と白色の水玉模様の縁取りがなされ、四辺の赤地花卉文の縁は細い花唐草文で飾られる。模様全体の輪郭に金箔を重ねる。裏地は経に絹糸、緯に太めの木綿糸を用いた交織で、黄地と赤地の縞をつくる。
- 購入金額 6,000,000円



- 2 ○名称 人物・動物文更紗祭礼布(じんぶつ・どうぶつもんさらささいれいふ)
- 作者等 インド・コロマンデル海岸
- 時代 インドネシア・スラウェシ島トラジャ 18世紀後半～19世紀前半
- 品質 木綿単糸平織(経:S・20本/cm 緯:S・28本/cm) 片面染め 媒染模様染め・蠟防染模様染め(手描き)
- 員数 1枚
- 寸法等 縦102.0cm 横382.0cm
- 作品概要 南スラウェシの古都パロボから50キロ離れたトラジャ地方に伝わったインド更紗。横長の1枚の木綿布にイスラム建築風の4つの花卉形アーチを描き、それぞれの空間には草模様を散らし、右からラージャ(貴族の男性)とその伴侶、2人の曲芸師、曲芸団の演技を見物するラージャ、象上の輿に乗るラージャを描く。4つの空間を仕切る柱は、淡藍、白、赤の羽根模様で彩られ、柱頭には一対の獅子が表される。柱頭の上方には大きな8弁の花模様を中心に花唐草が伸びだし、アーチ全体を充填している。
- 購入金額 5,500,000円



<考古> (4件)

- 1 ○名称 壺形土器(つぼがたどき)
- 作者等 不明(土器型式から東北地方北部と推定)
- 時代 縄文時代 前2000年～前1000年
- 品質 土製
- 員数 1点
- 寸法等 高28.0cm 最大径20.5cm
- 作品概要 口縁部に4つの橋状把手を持つ壺形の土器。体部には4つの大きな渦巻文が施されている。文様部は部分的に赤彩が行なわれ、生地の白色とのコントラストが大変美しい。上半部2箇所において土器製作時の粘土紐接合部で割れている。文様等の特徴から、縄文時代後期前葉の東北地方北部に分布する十腰内(トコナイ)I式土器と考えられる。この土器文化期では、洗骨した遺骨を壺に納めて埋葬する再葬墓が流行した。遺骨を納め易くするため、壺の肩部付近を水平方向に切断する場合があった。本品に認められる水平方向の2箇所の割れは、再葬に伴う切断である可能性が高い。
- 購入金額 13,824,000円



- 2 ○名称 注口土器（ちゅうこうどき）
 ○作者等 伝岩手県三戸郡五戸町姥川
 ○時代 縄文時代 前2000年～前1000年
 ○品質 土製
 ○員数 1点
 ○寸法等 高29.6cm 口径11.0cm 最大幅25.4cm 底径5.0cm
 ○作品概要 本体部は長頸の壺形で、肩部に注ぎ口が付く。頸部から胴部上半にかけて、凸帯および磨消縄文を施す。文様上には瘤状突起を規則的に配している。その器形や文様から東北地方に分布する新地式土器と考えられ、同型式の土器の中でも大形で、ほぼ完存する例として貴重である。注口土器は、縄文時代後半期の東日本地域で盛行した。同時期に土偶、石剣、石棒、石刀等の呪術具も流行することから、その用途を酒類等の液体を用いた呪術に使用した道具と考えられることもある。これら呪術具は、やがて九州にも伝わり、独自の呪術具を誕生させるなど、九州の縄文文化に多大な影響を与えた。
- 購入金額 3,780,000円



- 3 ○名称 飛騨地方採集石器・石製品（ひだちほうさいしゅうせつき・せきせいひん）
 ○作者等 主に飛騨地方
 ○時代 主に縄文時代 前10000年～前400年
 ○品質 石製
 ○員数 810点
 ○寸法等 石鏃を中心に、石錐、磨製石斧、打製石斧、石錘、御物石器、石冠、異形石棒等を含む。
 ○作品概要 岐阜県高山市在住の星達守氏が永年にわたり収集してきた飛騨地方の縄文時代の石器・石製品を主体とする考古資料である。コレクションの中心となる石鏃は、地元の石材である下呂石やチャートを用いて製作されたものだけでなく、長野県で産出する黒曜石を用いたものもあり、石器石材から当時の交流圏を推定することができる。また、御物石器、石冠、異形石棒など縄文時代を代表する呪術具も含まれている。中でも御物石器は飛騨地方に特有のもので市場に出ることが滅多に無い貴重なものである。石冠には九州でも出土する型式のものも含まれている。多くは採取場所が記されており、資料的価値も高いものとなっている。
- 購入金額 3,000,000円



- 4 ○名称 双龍環頭大刀（そうりゅうかんとうち）
 ○時代 古墳時代・7世紀
 ○品質 金銅製
 ○員数 1振
 ○寸法等 全長113.5cm 柄長26.3cm 鞘長86.7cm 環頭幅10.7cm 鞘幅7.1cm 厚1.9cm
 ○作品概要 柄頭だけでなく鞘の柄も良好に遺存し、全体の形状がよく分かる点で希少な古墳時代の環頭大刀である。柄頭、鐔、鞘の飾金具および真金具は金銅製で、鉄製の刀身や鞘木も部分的に残る。柄頭には透かし彫りにより2匹の龍が向かい合わせで玉を食む姿が表され、柄や鞘にはS字形または蕨形のモチーフで飾られる。双龍環頭大刀は、朝鮮半島の新羅などの影響を受けて6世紀に古墳の副葬品として登場し、本品は龍文様の退化などから7世紀にまで製作年代が下ると推定される。古墳時代の対外交流をうかがい知る考古資料として非常に重要である。
- 購入金額 20,000,000円

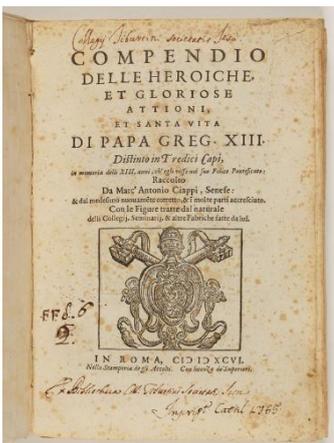


<歴史資料> (9件)

- 1 ○名称 豊臣秀吉朱印状（とよとみひでよししゅいんじょう）
 ○時代 安土桃山時代 天正20年(1592)
 ○品質 紙本墨書 卷子装
 ○員数 1巻
 ○寸法等 本紙：縦23.4cm 横64.5cm 表装：縦28.4cm 横91.0cm 軸長29.8cm
 ○作品概要 本作品は天正20年(1592)、宗義智(1568～1615)に宛てて出された豊臣秀吉(1537～98)の朱印状。6月3日付。朝鮮に派遣される代官7人に通訳を1人ずつ帯同させることを命じる内容である。「文禄の役」において、漢城(ソウル)陥落後、秀吉の朝鮮統治の方針を示すものである。本朱印状は、義智に宛てられたことから、宗家に伝来したと考えられるが、研究史上、原文書の所在は不明とされてきた。明治時代の史料集に掲載されており、書写されたことは分かっていたが、その後散逸したと見られ、長らく所在が不明であった。編纂史料でのみ存在が知られていた重要史料の原文書として、本朱印状は非常に価値が高い。
- 購入金額 2,160,000円



- 2 ○名称 チャップ「グレゴリオ13世伝」(ちゃっぴ ぐれごりおじゅうさんせいでん)
 ○作者等 マルコ・アントニオ・チャッピ著
 ○時代 イタリア 1596年
 ○品質 紙本印刷 洋装本
 ○員数 1冊
 ○寸法等 縦22.1cm 横15.5cm 厚2.4cm
 ○作品概要 本書はローマ教皇グレゴリオ13世(1502～1585、在位1572～1585)の業績と生涯を述べた伝記である。1596年刊行、初版(1591年刊行)を訂正増補したものである。挿図を全く掲載していない初版本と比べると、1596年版は41点の木版画の挿図を掲載しており、注目に値する。本書には、日本に建設された基督教の4つの建築物(豊後臼杵のノヴィシアド、豊後府内のコレジオ、安土と長崎のセミナリオ)に関する記述や、天正遣欧使節のローマ教皇謁見の場面の説明がある。これらは、日本の基督教伝来期の様相を伝えると同時に、日本がヨーロッパに如何に紹介されたかを指し示すものである。本資料は、日本国内では数箇所の機関が所蔵するにとどまり、非常に希少な資料である。
- 購入金額 4,320,000円



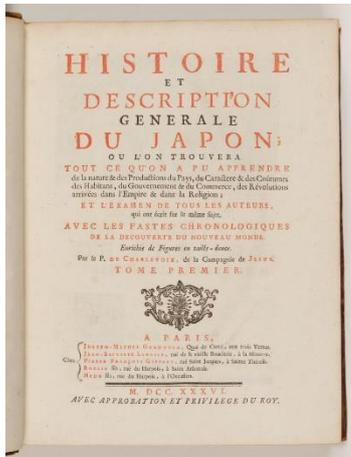
- 3 ○名称 徳川家康書状（とくがわいえやすしよじょう）
 ○時代 安土桃山時代・慶長3年(1598)
 ○品質 紙本墨書
 ○員数 1幅
 ○寸法等 本紙：縦17.6cm 横46.8cm 表具：縦99.8cm 横49.9cm 軸長：54.7cm
 ○作品概要 掛幅装。慶長3年(1598)1月30日付、太田一吉(?~1617)宛、徳川家康(1542~1616)の書状。太田一吉は、慶長の役(丁酉倭乱)にて、総大将格の小早川秀俊(秀秋)(1582~1602)の目付として朝鮮に渡海した。慶長2年10月頃、加藤清正(1562~1611)らにより蔚山で築城が開始されるが、明・朝鮮軍は蔚山城を攻撃、太田は籠城を開始した。年が明け、1月2日、黒田らの援軍が到着、4日に明・朝鮮軍は撤退した。太田は慶長2年の末、家康に籠城の旨を伝えたと見え、家康は本書状で太田が蔚山城を堅く守ったことを称賛する。一方、家康自身は、慶長2年末に暇を下されて江戸に逗留中だが、近々上洛することを伝えている。本書状によって、慶長の役での蔚山城籠城の様子を垣間見ることができる。
- 購入金額 2,500,000円



- 4 ○名称 稲富流鉄砲秘伝書（いなどめりゅうてっぽうひでんしょ）
 ○作者等 野間喜左衛門尉重秀
 ○時代 江戸時代 慶長18年(1613)
 ○品質 紙本着色・墨書 折帖・折畳装
 ○員数 7帖1舗
 ○寸法等 (1)縦24.4cm 横381.8cm (2)縦24.2cm 横422.9cm (3)縦24.1cm 横486.5cm (4)縦24.4cm 横508.3cm (5)縦24.6cm 横1102.6cm (6)縦24.5cm 横1627.8cm (7)縦24.5cm 横1814.5cm (8)縦48.7cm 横116.8cm
 ○作品概要 稲富一夢(祐直、理斎、1552~1611)を祖とする稲富流砲術の秘伝書。稲富流は近世の代表的な砲術流派で、その秘伝書の内容は鉄砲の起源から、射撃の心得、得物による射撃方法・姿勢、玉の種類、玉目による鉄砲の仕様、火薬原料の配合、照準具の説明など、鉄砲に関する諸事にわたっている。福岡藩黒田家や米沢藩上杉家、彦根藩井伊家など名立たる大名家に採用され、地域的にも階層的にも多くの武士に広く受容された。本資料は後欠の2帖以外に残る奥書から、慶長18年(1613)9月に野間喜左衛門尉重秀が渡辺三郎兵衛に伝授したものと分かる。稲富一夢の没後に近い時期の秘伝書であり、すでに当時の砲術が多様な武士層にまで及んでいた実態を示す好資料といえる。
- 購入金額 3,240,000円

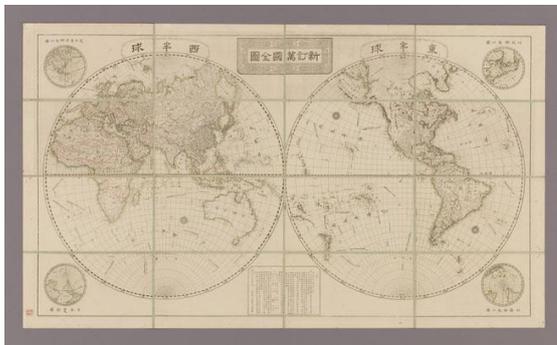


- 5 ○名称 シャルルヴォア「日本の歴史」(しやるう`おあ にっぽんのれきし)
 ○作者等 ピエール・フランソワ・グザヴィエ・ド・シャルルヴォア著
 ○時代 フランス 1736年
 ○品質 紙本印刷 洋装本
 ○員数 2冊
 ○寸法等 第1巻：縦25.8cm 横20.5cm 厚4.8cm 第2巻：縦25.8cm 横20.5cm 厚4.9cm
 ○作品概要 本書は日本のキリスト教伝来期におけるイエズス会の活動を記述するとともに、日本人の生活や慣習などについても、多くの図版を交えて解説する。図版中、注目に値するのは、安土城とその城下町の図である。天正遣欧使節がローマ教皇グレゴリオ13世に献上した「安土図屏風」は所在が不明であるが、この図版が、「安土図屏風」と何らかの関連性を持つのであれば、本資料の価値は高い。シャルルヴォアは日本に滞在することはなかったが、本書を著すにあたって数多くの文献を参照した。そのため、本書を通じてヨーロッパの日本観を垣間見ることができる。日本文化をヨーロッパに紹介し、日本知識の形成に資した点で、本資料は高く評価される。
- 購入金額 1,836,000円



- 6 ○名称 新訂万国全図（しんていばんこくぜんず）
 ○作者等 高橋景保作
 ○時代 江戸時代 文化7年（1810）成立、文化13年（1816）刊
 ○品質 紙本印刷筆彩 折畳装 表紙絹張り
 ○員数 1鋪
 ○寸法等 縦116.1cm 横199.2cm
 ○作品概要 江戸幕府天文方の高橋景保（1785～1829）が製作した両半球世界図。文化4年（1807）に世界地図作成の幕命を受けた景保は、アロスマスの世界図を原図として、天文学者の間重富や長崎通詞の馬場貞由の協力を得て、文化7年（1810）に手書きの「新訂万国全図」を完成させた。それを東アジア帯について改訂し、銅版画家・垂欧堂田善による銅版彫刻をもって、文化13年（1816）に印刷刊行したのが本図である。本図では日本を基準に「西半球」・「東半球」の名称を定め、図上でも日本を中心として左に「西半球」、右に「東半球」を配している。また図左上の副図は、京都を零度とする子午線を通した日本中心の半球図とするなど、翻訳版ではない日本製官版としての独自性がみられる。

○購入金額 3,780,000円



- 7 ○名称 佐州金銀採製全図（さしゅうきんぎんさいせいぜんず）
 ○作者等 如龍齋筆
 ○時代 江戸時代 嘉永6年（1853）写
 ○品質 紙本著色 卷子装
 ○員数 1巻
 ○寸法等 本紙：縦30.0cm 横2591.9cm 表装：縦30.0cm 横2664.0cm 軸長32.5cm
 ○作品概要 江戸時代の佐渡金銀山、特に相川金銀山における採掘の様子を描いた絵巻。採鉱、選鉱、金銀銅の製錬、小判への加工の工程、および砂金の採取を図説する。国内外に多くの残存例が知られるいわゆる佐渡金銀山絵巻だが、本作品は1.「金銀採製全図」を冠する名称、2.巻頭が「惣目録」から始まる、3.文化14年（1817）に導入された水車による鉱石の粉碎場面が描かれる、という諸点から、文政2年（1819）から幕末期にかけて描かれたタイプに属する。その中でも嘉永6年（1853）という制作年代が明記されることは特筆され、さらに描写の丁寧さや彩色の豊かさ、注記の細かさ等においても、他の良本に劣らぬ内容を持つ。

○購入金額 2,600,000円



- 8 ○名称 リンデン伯「日本の思い出」（りんでんはく にっぽんのおもいで）
 ○作者等 リンデン伯 ヨハン・マウリッツ著 オランダ・ハーグ
 ○時代 オランダ 1860～66年刊

- 品 質 紙本印刷 未製本
- 員 数 10冊
- 寸法等 図：縦53.9cm 横71.8cm 扉・序文・解説：縦70.7cm 横54.2cm
- 作品概要 オランダ国王ウィレム3世の侍従長リンデン伯爵（1807～64）が、安政2年（1855）に来日し、長崎に滞在した時の印象を、帰国後に画集としてまとめたもの。製作はハーグのミーリング王立石版印刷工場で行われ、1860年から66年にかけて10回の配本で印刷刊行された。オランダ国旗がはためく出島、金比羅山や出島から眺めた長崎の街並み、唐寺、ジャンク船や御座船など様々な船で賑わう長崎港といった、近世の長崎らしい光景を色鮮やかに描き出す。
幕末長崎の姿は写真資料にも多く伝わるが、色彩を伴う点は写真資料には無い、多色刷り石版印刷による本作品の特徴といえる。
図版と解説文が完存し、かつ配本当時の状態をとどめる点、大変貴重である。
- 購入金額 8,100,000円



- 9 ○名 称 琉球使節江戸登城行列図（りゅうきゆうしせつえどとじょうぎょうれつず）
- 時 代 江戸時代・19世紀
- 品 質 紙本著色
- 員 数 2巻
- 寸法等 上巻：（本紙）縦35.7cm 横2255.0cm（表具）縦35.7cm 横2328.3cm
下巻：（本紙）縦35.6cm 横1881.4cm（表具）縦35.6cm 横1955.9cm
- 作品概要 卷子装。本図は、琉球国王尚育（1813～1847、1835即位）の襲封を江戸幕府将軍・徳川家斉に謝恩するため、天保3年（1832）に日本に派遣された琉球使節（謝恩使）の江戸城登城行列を描いたもの。行列の全体を2巻に収め、上巻に琉球使節を、下巻には薩摩藩士の行列を描く。描写は人物の表情や行列道具など細部まで丁寧であり、かつ色彩豊かである。琉球使節は、朝鮮通信使とともに、大規模な外交使節として社会的な関心も高く、来日時には多くの刊行物や記録画が作成された。使節を描いた肉筆画作品も複数が確認されているが、画題となる使節の年次が明らかで、登城行列の全体を描いた図は、天保3年謝恩使についてはこれまで未確認であり、大変稀少性が高い。
- 購入金額 15,000,000円

